

金子みすゞと童謡の歩み

今から100年前の大正7年7月1日、一冊の雑誌が発刊されました。子どもたちに本当に価値のある芸術的な詩や読み物に触れてもらうために、日本初の童話童謡雑誌『赤い鳥』が誕生した瞬間です。
長門市が誇る童謡詩人金子みすゞも影響を受けた童謡時代の幕開けを振り返ります。



写真提供：金子みすゞ著作保存会

「童謡」とは

当時、子どものための歌は、昔から各地で歌い継がれていた「わらべうた」か、文部省が教育のためにつくった「唱歌」といったものでした。それらに対して、子どもの心を子どもの言葉で表した、子どものための詩が「童謡」です。

現在では「童謡」とは曲がついてリズムに乗せて歌うものというイメージが一般的ですが、当時は曲がついて歌えるものとも、静かに読んで味わうものとも、詩人によって考え方が違っていました。『赤い鳥』では創刊当初は曲譜を載せていませんでしたが、やがて作曲家たちが曲譜を紙面に載せるようになり、北原白秋は特に山田耕作と組み、『からたちの花』、『こ

のみち』、『待ちぼうけ』、『あわて床屋』などが二人の代表作として知られています。

大正の童謡運動

日本初の童話童謡雑誌『赤い鳥』は、主宰者である児童文学作家の鈴木三重吉の呼びかけにより当時一流の詩人や作家が集まり創刊され、児童文学の隆盛期の幕開けとなりました。北原白秋の『赤い鳥小鳥』や芥川龍之介の『蜘蛛の糸』、新美南吉の『ごん狐』など現在でも知られている童謡や読み物も『赤い鳥』で発表された作品です。

『赤い鳥』創刊の翌年には『金の船』（後に『金の星』に改題）、さらにその翌年には『童話』などの児童文学誌が次々と刊行されました。これらの雑誌で、読

者の心を引きつけたのが「投稿欄」です。創作童謡、童話、綴方（作文）、自由画などの部門が設けられていましたが、注目すべきは創作童謡でした。

大正時代の童謡隆盛期、詩作に興味を持った子どもから大人まで、読者たちは熱心に童謡を書いて投稿しました。それぞれの雑誌の選者、『赤い鳥』では北原白秋、『金の星』では野口雨情、『童話』では西條八十を師と仰いで詩作に励み、また仲間たちを集めて同人誌を発行するなど、創作活動に夢中になりました。この時代に投稿詩人だった人々が、後の童謡界を担う児童文学者として大成していったのです。

長門市が誇る童謡詩人・金子みすゞも、当時の童謡運動に乗った投稿詩人でした。

金子みすゞと『赤い鳥』

『赤い鳥』創刊当時、みすゞは女学生という多感な時期でした。本が大好きなみすゞは、実家の書店に毎月入荷されてくるこの雑誌を毎月欠かさず目を通していたことでしょう。

やがて、二十歳になったみすゞは下関市で童謡を創作し、憧れの詩人・西條八十が担当する『童話』に熱心に詩を書いて投稿を始めます。しかし、一年も経たないうちに師と仰ぐ西條八十は2年間、フランス留学へ旅立ってしまいます。

師のいない間、みすゞは『赤い鳥』にも童謡を投稿しました。大正13年10月号に『田舎』、14年1月号に『入船出船』、翌2



▲『赤い鳥』にもみすゞの詩が掲載された

月号に『仔牛』が掲載されました。また、北原白秋が担当していた地方民謡募集欄にも、仙崎の鞠つき歌を報告して掲載されています。

現代に引き継がれる童謡

昭和に入ると児童文学誌は次第に不振となり、最も長く続いた『赤い鳥』や『金の星』も廃刊となります。軍国色も強まり、童謡は軟弱であると排斥されるまでになりました。

しかし終戦後、ベビーブームの到来もあり、再び子どもの歌への関心が高まりました。『ぞうさん』（作詞…まど・みちお／作曲…團伊玖磨）、『いぬのおまわりさん』（作詞…佐藤義美／作曲…大中原）など、現在でも歌われる多くの歌が作られ、ラジオやテレビで放送されたことにより、日本中の子どもたちに親しまれました。

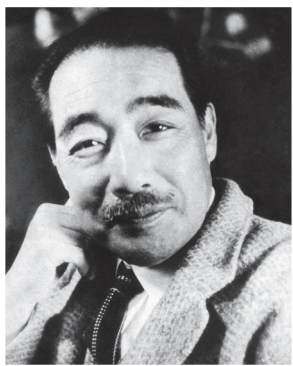
大正期に創刊された一冊の雑誌から生まれた芸術・文学としての童謡。子どもたちの豊かな感性を育む歌として現代に引き継がれ、その良さが見直されています。

『赤い鳥』創刊100周年

童謡100年 トライアングル展

今回の展示では、山口、福岡、大分の三県を童謡の「トライアングル」として、各県を出身とする童謡詩人たちを紹介します。彼らの功績を顕彰する各記念館にも協力いただき、代表作や創作活動の軌跡を関連資料とともに展示します。

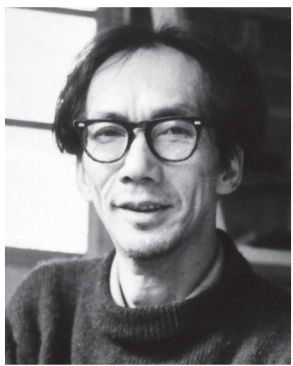
- 開催期間 7月1日（日）～9月30日（日） 9時～17時（最終入館は16時30分）
- 開催場所 金子みすゞ記念館企画展示室（市民は身分証明書の提示で無料）
- 問い合わせ 金子みすゞ記念館 Tel：26-5155



北原 白秋

（1885～1942）

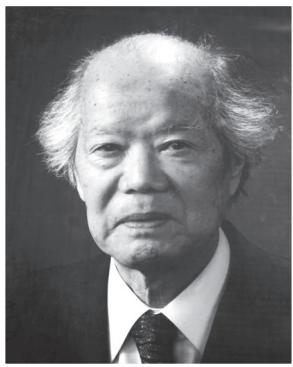
福岡県柳川市出身。『赤い鳥』主宰者・鈴木三重吉の強い希望で、創刊時より創作童謡を発表しながら、投稿された童謡作品の選考を担当。代表作は『赤い鳥小鳥』『揺籃のうた』『アメフリ』など。



佐藤 義美

（1905～1968）

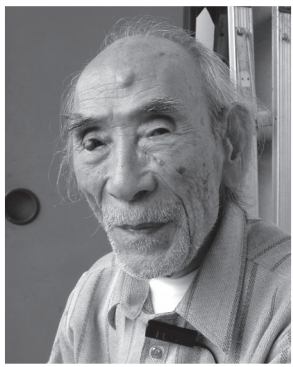
大分県竹田市出身。中学生の頃から詩作に興味を持ち、雑誌などに盛んに投稿していた。戦後は児童雑誌の出版に携わる。代表作は『いぬのおまわりさん』『アイスクリームのうた』『グッドバイ』など。



与田 準一

（1905～1991）

福岡県みやま市出身。郷里で教員を務めながら『赤い鳥』に投稿していたが、白秋に認められて上京を決意。『赤い鳥』の編集にも携わった。童謡の他、児童向け読み物も多数発表。代表作は『ことりのうた』『たかいたかいしてよ』。



まど・みちお

（1909～2014）

山口県周南市出身。幼少期に台湾へ渡る。幼児向け雑誌に投稿した童謡が白秋に認められ、創作活動を始める。代表作は『ぞうさん』『やぎさんゆうびん』『一ねんせいになったら』など多数。